欧米言語文化学会関西支部 2023 年度例会

《発表要旨》

さらけだされた後悔－“Tell Me A Riddle“における母性の問題

山　﨑　亮　介

アメリカの女性作家ティリー・オルセン（Tillie Olsen, 1912-2007）は 1930 年代から執筆活動をはじめ、紆余曲折を経て 20 世紀後半にかけて作品を世に送り出した。それらの作品の多くには、若い頃から避けることのできなかった作者の労働の痕跡が反映されている。世紀転換期以降も、特に国外を中心として、オルセンの作品が後の世代のフェミニストたちに与えた影響を再評価する声は少なくない。

本報告において取り上げる作品“Tell Me A Riddle”（1961）は、出版した年にオー・ヘンリー賞を受賞し、1980 年には同タイトルで映画化もされた作者の代表作のひとつとされている。本報告では、本作品に描かれている母親とその家族との関係性に着目しながら、母親であることとその労働から生じているようにみえる母親の葛藤について検討したい。

《ワークショップ発表要旨》

文学者の見たナポレオンの大臣ポルタリス―ウォルター・スコットの作品を中心に―

深　谷　　格

ジャン・エティエンヌ・マリー・ポルタリス（Jean Etienne Marie Portalis, 1746-1807）は、王党派の弁護士で、フランス革命時に投獄や亡命を経験した後、ナポレオンの下でフランス民法典（ナポレオン法典）を起草し、ローマ教皇との政教条約（コンコルダ）に基づく国内法を起草し、宗教大臣を務める等、法と宗教の両面での秩序回復に多大な貢献をした。

ポルタリスは、ナポレオンに忠実な法律家として、ナポレオンの評伝や歴史書、評論に登場する。本報告では、ポルタリスが、ウォルター・スコット（Walter Scott, 1771-1832）の大著『ナポレオン・ボナパルトの生涯』（*Life of Napoleon Buonaparte*, 1827）でどう扱われているかをフランスの文学作品と比較して考察する。スコットランド出身の弁護士でもあり、フランス人亡命者の娘と結婚したというスコットの経歴にも着目したい。

オーウェルの『動物農場』とミルトンのソネット 12 番

江　藤　あさじ

ジョージ・オーウェル（George Orwell, 1903-50）の作品の一つである『動物農

場』(*Animal Farm*, 1945)に描かれる歴史上の人物となれば、実に様々な候補が挙がるであろう中、今回は、序文に登場するジョン・ミルトン(John Milton, 1608-74)に焦点を当てることにした。実際のところ、オーウェルは、序文の中でミルトンを詳細に描いてはいない。むしろ、自分の主張の後押しをする言葉として、ミルトンのソネットのたった 1 行を引用し、そこにその作者の名前を挙げているのみである。

書き手が、自身の主張の裏付けとして他者の言葉を引用するとき、読者は、その他者の言葉が、書き手の思いを代弁し、みごとに集約していると解釈する。今回は、オーウェルの思いを、いかほどにミルトンが代弁・集約していると言えるのかについて、オーウェルが引用したソネットの全文を読むことで考察してみたい。